

## これまでの審議会委員意見等の項目別分類

## 1 今後の社会情勢予測について

- 人生 100 年時代。少子高齢化、人口減少がさらに進む。
- 2030 年には現在の仕事の 50%が AI などにとってかわられると言われている。便利となる一方で人間がシステムに依存させられる可能性があり、人の存在のあり方がより問われてくる。
- 子どもの貧困、認知高齢者の割合が増加する。
- これまでの通勤・通学の在り方が変わり、これまでの枠組みがなくなることにより、これからは自分で自分の生活を律する必要がある。
- 経済格差はより大きくなり、すべての大人が安心して働ける社会になっているのか大きな危惧がある。
- 「先行き不透明な時代」・「予測困難な時代」・「不確実性」
- 「成熟社会」
- 「Society5.0（超スマート社会）」

## 2 現状の課題

- 地域社会での孤立が深刻になる中、家庭でも孤立している子どもは、保護者以外の大人と会うことが出来る場所は学校しかない。
- 日本の入試制度はいまだに工業社会のやり方でやっている。
- 職業的自立偏重の狭義の学力重視からの転換がいま喫緊に必要。
- 先生も疲弊している中で、CS、学校支援本部等はみな同じ顔ぶれになっており、地域で担う人たちも疲れてしまっている。
- 個別最適を突き進めることと同時に、全体最適に持っていくにはどうしたらいいのか議論をしなくてはいけない。
- 地域コミュニティは活性化していない。

### 3 あるべき姿、定義の再設定について

#### (1) 社会

- 子どもたちを主役とした「持続可能な社会」「誰も取り残さない社会」
- 「同じだから平等ではなく、異なるから平等な（比較しない）社会へ」。
- 『学び』の社会へ←誰もが価値を創造し続ける社会へ
- 「評価を変えよう、やめよう」PDCAサイクルは教育にはあてはまらない。縮小化するだけ。開放的な循環に変えていくことが必要。評価しない。序列化はやめる。

#### (2) 学校

- 学校は一人ひとりの違いを認めあい、比較・競争ではなく協働して創造する場へ。
- 学校が（あらゆる課題を）抱え込まない。
- 就学前から後期中等教育までの15年間で、その後の学び続ける力の基盤をつくる。
- 狭義の学力をつける場から、子どもを中心とした「学びのプラットフォーム」みたいな、居場所機能が中心に。子どもと関わることで大人も学んでいき、教師も子どもと出会うことで学び直しながら自らの専門性を高めていく「学びが重層的に膨らんでいく学びのプラットフォームのような場所」へ。
- 「地域や保護者と協働する学校」「地域に開かれた学校」「地域と共にある学校」「市民に開かれた学校」
- 学校は子どもが幸せになるための準備の場である。

#### (3) 地域

- 学校が変わるためには、学校を取り巻く保護者を中心とした地域の意識が変わる必要がある。
- 地域が学校を支援するのではなく、地域と学校が協働するという考え方に変えていく。
- 子どもをまん中にした地域社会

#### (4) 学び

- 学びの場、学びの在り方、学びの概念そのものについて、どう変わるべきか。
- 「学びを発見し続ける」「知識を自分だけのものにしない」「探求して、発見する喜びや驚き」「仲間と一緒にあって、発見し、創造するうれしさ」「それに駆動される「学び」「自分を仲間と一緒ににつくりつづけるうれしさに満ちた開放系の、やめられなくなる、運動」（←子どもの視点からすると「学び」と「遊び」の両輪として使っていた方が良い。
- もう少し時間をかけて、時には休んで、そして学びなおしていくことが認められることが重要。
- 集団でコミュニケーションを取りながら体験的に学ぶ楽しさというのが、教科にとどまらない学校における学びの素晴らしさ。

#### 4 育みたい力・心

- 生きる力、生き抜く力、生きて働く力
- 持続可能な社会の担い手、創り手となる力
- センス・オブ・ワンダー（不思議に思う力・好奇心）
- 意欲・探究心
- 学び続ける力、自ら学んでいく力
- あらゆる環境の変化を乗り越え、自ら豊かな人生を切り拓いていくことのできる力
- 自分たちの問題を自分たちで解決する力
- 自分で見て、自分で考え、自分で判断して行動する（力）
- 自分で自分の生活を律する力
- あらゆる他者の価値を認め、尊重できる力
- 対話的な関係において、お互いに理解・承認をしていく力。人との関わりを通して、自分の個性も活かし、そして他者を理解し、共生していく力。
- 主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力
- 変化を楽しむ力
- デジタル化などの環境に順応した創造する力
- 社会への関心興味
- 自己肯定感、自己有用感
- 心理的安全性
- 美意識・美的感覚
- 人間力
- 合意形成が図れる人間力
- ICTをツールとして活用し必要な情報を自ら取捨選択する力
- AIを使いこなす力

## 5 全体的な方向性、全体に関わる視点（に関わるキーワード）

- 「一人も取り残さない」、「誰一人取り残さない（SDGs）」
- 「孤立させない」「寄り添い」、「つながり（をつくっていく）」、「対話」、「コミュニケーション」、「連携」、「協力」、「私たちはひと連なり」
- 自分が地球の一部で、ヒトは動物の一種で、私たちは地球や自然界とひと連なりの存在であるということを子どもも大人も認識する必要がある。
- 「ことば」と「あいだ（＝人と人との関係性）」
- 「配慮と創造による対話」「対話による創造」
- 「垂直序列化から水平多様化へ」
- 「間（はざま）」を埋める、「間（あいだ）」をつくりだす、「間（あいだ）」から生み出す
- 「評価ではなく認め合いへ」
- はてなの連鎖
- 「ワクワク感」
- 「多様性」、「多様性と対話」
- これから増えていくニューカマーの子どもたちに関する視点
- 「相互依存」
- 「共生社会」
- 「子どもは小さな大人ではない」。大人、親の幸せがあって子どもたちの幸せがあるということも子どもたちもわかっている。子どもたちにはそういう感性、力がある。保護され指導される存在だけではない。
- 「ふるさと杉並」
- 「健康・安全」
- 「教育のまち・すぎなみ」
- 「人にやさしさ、自分に強さ（自律と貢献・社会の中で共に生きる知恵）」

## 6 施策・取組の方向性

### (1) 全体に共通するもの

- 「学社融合」学校教育と社会教育のハード面・ソフト面で融合させる。
- 「まち」との協働（ただしこれからは「課題」だけではなく「責任」も共有していく新しいスタイル）の推進
- 主体的・対話的で深い学びを、大人と子どもが同時に体験できる環境をつくる。
- 障害がある人もない人も、互いに尊重し合いながら暮らしていける全員参加型の共生社会を一緒につくる。子どもたち一人ひとりがかつ「権利」を自覚し、行使できるような支援を学校と地域、家庭で取り組む。また、多様性を認める相互承認の段階から、多様な他者と協働する段階への支援。持続可能な社会をつくるために自分らしい貢献が可能になり、キャリア発達が促されるような、インクルージョンをめざした社会づくりを進める。
- 多角的なサポートや、支援が必要なことを前提として、「質の高い教育をみんなに」という課題を解決する。インクルーシブや、教育（学習）格差の問題などで、声をあげられない方々の声を吸い上げ、取りこぼしを無くす。

### (2) 乳幼児期（就学前教育）

- 人格形成の基礎を培う就学前教育・幼児教育の充実
- 生きる力の基礎を培う幼児教育が全ての教育の基礎となるということを園と学校、保護者、地域と共有し、生涯学び続ける人を育てる。

### (3) 乳幼児期（就学前教育）と学齢期（学校教育）に共通するもの

- 子どもの育成や対応を担うのは教師だけではない。教師以外のスタッフ、地域の支援を得て、教師の役割とそうではないものを明確にしていく。
- 地域、保護者とのつながりの中で教育者が、子どもをしっかりと育てると共に、地域や保護者の役割も明確にし、共に育てる大切さを共有する。
- みんなで協力しあって、まちと子どもたちを一緒に育てる。
- 子どもの育ちを支える共同体を構築する。
- すべての教職員が一人ひとりの子どもを見守る教育の実現
- 「個別最適な学び」・「個に応じた指導」・「指導の個別化、学習の個性化」・「協働的な学び」の実現、充実。個別最適な学びと協働的な学びの往還。
- 就学前から保幼小中の一貫教育の推進、就学前教育から中学校までの学びの連続性の構築
- 好奇心や探求心を大切に、デジタル化などの環境に順応した創造する力を育てる。
- AI の時代の中でも、よく考え人と思いや考えを共有しながら生きる子どもを育てる。
- 主体的・対話的で深い学び（子どもたちがみずから関心「センス・オブ・ワンダー」をもって、好奇心を持って主体的にかかわり、対話的な関係の中で人と対話する中で新しい価値を探求するような深い学び）を実践する。それぞれの成長段階や状況において、子ども達の可能性を潰すことなく、多様な形で好奇心を開拓し、主体的な学びにつながる環境（興味や能力を伸ばしたい子どもが、より深い学びを探求し、存分に成長できる環境）をつくる。

- 自分たちの周りを自分たちで変えていくという経験をすることによって、大人になって社会を変えていくことができる、というような自己有用感を育てていく。
- 子どもたちに寄り添い、子どもの考えや想いに耳を傾け、子どもたちが自信を持てる場をつくる(子ども自身の好奇心を中心に置き、大人たちはそれを傾聴し応援する)。また、地域はその受け皿として、子どもたちの心の見守りの一翼を担う(基本的な学習からでは自己肯定感を得にくい子どもたちもいるため、地域力を活かし未来に希望をもてるよう、多様な学習の機会を提供し補う)。
- 子どもが、自分は愛されている存在と実感して生活を送れるようにする。
- 多様性に対応した教育システムの構築。どのタイプの子どもたちも将来の選択肢がしっかりと出来る仕組みを整えて行く。様々な場面で「選択肢」のある教育環境づくり。
- 幼小中高という縦の軸と地域保護者の横の軸が交じり合っ、お互いの役割を認識し合う。それぞれの教育の大切さを知り、お互いを生かしあう。

#### (4) 学齢期 (学校教育)

- 地域がより深く学校教育に関わっていく必要がある中、協力できる人たちや地域も育てていく。地域も学んでいく。次の世代を育てていくための大人を育てていく。
- 学校を心の安全基地にする。
- 学力偏重主義を是正する。
- 生きて働く力を育成する。どれだけ知識、情報を溜め込んだより、それを駆使して何ができるか。
- 9年間を一貫した知・徳・体のバランスの取れた質の高い義務教育・学校づくりの実現
- キャリア発達が子どもに自覚できる、あるいは大人からの価値づけがあり、コンピテンシーを育てる視点をもつ教育環境づくり(キャリア発達の保障)を進める。
- 多様な学習形態を認めつつ、学校がもつプラスの機能を発展させる学校づくりを進める。

#### (5) 成人期・高齢期 (成人教育)

- 生涯にわたる学びあいを実現する。生涯学び、活躍できる地域を実現する。
- 地域にいろんな学びの場があると示していく。
- そこに来ることによってみんながワクワクし、つながりたいからそこに集まり、自然発生的に何かが起こるといことが、学校や子ども園・保育園を中心にプラットフォームになって展開していくような教育を行う。

## 7 具体的な取組①

### (1) 全体に共通するもの

- 持続可能な施設整備
- 社会や企業との連携
- 「デジタル」のフル活用（この10年で「デジタル」の位置づけは社会の中で確実に変わる。極端に言うと「衣食住デジタル」になる）を推進する。

### (2) 乳幼児期（就学前教育）

### (3) 乳幼児期（就学前教育）と学齢期（学校教育）に共通するもの

- 体験活動と言語活動の推進
  - ・ 対話的な関係の構築・活用
  - ・ 言語能力のほか、認知能力・非認知能力を高める。
  - ・ 集団でコミュニケーションを取りながら体験的に学ぶ楽しさを実現できる環境を、区としてソフトウェア・ハードウェア両面から整える。
  - ・ 学校での様々な経験、様々な人たちとの交流を通して学び、豊かな人間関係の構築や他者を尊重する気持ちを育み、自分たちを見守ってくれている大人たちがいるという安心感を子供たちに伝えていく。
  - ・ 地域で様々な体験活動・教育活動をし、子どもが生きる力を身につける。
  - ・ 社会体験によって、対話的な関係において、お互いに理解・承認をしていくことで、自分で自分の人生を切り拓いていく力を育む。
  - ・ 体験を通して自分の学びを編集していく中で、スキルや知識が必要になってくると、初めてそれが「生きる力」として生かされていく。
- 自然体験
- P T A以外の他の組織による学校への支援・協働。
- すべての教職員が一人ひとりの子どもの良さを多面的に見守る体制の整備（学級担任制の大胆な組み替え）
- 地域住民が学校において子どもたちと日常的にかかわることができる場面の整備。
- 持続可能な社会の作り手を育成するため SDGs の学習を実践する。
- 豊かな感性、デザイン思考を育てるため、アート教育を推進する。
- 教員の働き方改革の推進。一人ひとりが頑張る集合体から、協働による組織体へ（チーム学校の実現）。また、毎年、地域と協働で仕事の「棚卸し」を実施する一方、教員は、未来を担う子どもを育てる責任と誇りをもち、学び続けていく。

### (4) 学齢期（学校教育）

- 「ファシリテーション」教育の推進
- 共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のために特

別支援教育を着実に進める。

- 「フル・インクルーシブ教育（すべての時間をすべての子どもたちが同じ場（通常の学級）で過ごすことを原則とする教育）」の実現。多様な差異を尊重しあい、協力して社会をつくるために必要な、インクルーシブ社会に向けた基盤的体験の実施。
- 「市民性の教育」「主権者教育」の実施。自分自身の不満や困難を政治的な問題に捉え返し、政治に対して提言し、選挙権・被選挙権を行使し得るような公民教育・主権者教育の実施。
- 「STEM（Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学））教育」から「STEAM（Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics）教育」へ。
  - ・ 絵を描いたり、生涯スポーツを楽しんだり、本を読んだり、音楽活動を行ったりといった、文化的に豊かな生活を享受するための基盤的な体験をさせる。これまである活動も学校や地域の関わり方を工夫することで効果は上がる。
- 第4次産業革命へ適応できるよう、ICTやIoTを理解し、活用できる教育を実施する。
- 持続可能な視点での学校運営協議会の運営
- 学校・保護者・地域が、問題・課題だけでなく未来図を共有し共創するため、各校でCS中心に井戸端会議をし、未来図を創ってから共に検証する。出来れば学校・保護者・地域で共創した、各校の実態に合わせたオーダーメイドの教育活動を進める。
- 不登校児童・生徒の社会的自立を支援する。
- 英語を自在に使いこなす児童・生徒を育成する。
- 「杉並」を愛し、「杉並」に住み続けていきたいと子どもたちが思えるような教育・環境・行政を整備する。
- 地域の歴史や伝統、自然など既成の環境を学び理解するとともに、新たに地域の文化的な空気感を子どもたち自ら関わり作り上げることで、地域の一員として誇りや親しみを実感し、地域への思いを醸成する。
- 情報リテラシーの向上（高い情報モラルをもち自在にPCを使いこなす事のできる児童・生徒の育成）。
- オンライン・遠隔授業と対面授業の使い分け
- 「オリンピック・パラリンピック」に変わる次の大テーマを早急に掲げ、学校教育内で数年かけて子供たちが取り組んでいく。

## **（5）成人期・高齢期（成人教育）**

## 8 具体的な取組②（より具体的な事業に関する提案等）

### （1）全体に共通するもの

### （2）乳幼児期（就学前教育）

- 幼児教育アドバイザーの充実

### （3）乳幼児期（就学前教育）と学齢期（学校教育）に共通するもの

- 「子ども教育委員会」の設置  
～定期的に子どもたちが集まり教育長に提言する「子ども教育委員会」のようなものを設置する。

### （4）学齢期（学校教育）

- 卒業生が戻り、後輩や地域のために協力する「サーモン計画」の実施
- 学校再編（統廃合）の実施
- 学区域の見直し
- 連携する小学校と中学校の学区域を一致させ、連携型でも小中一貫教育が推進できるようにする。
- 不登校対策として・・・
  - ・ 不登校特例校（校内フリースクールなども含む）の設置
  - ・ ICTを活用した支援の仕組み、スクールカウンセラー配置拡充、校内外の居場所づくり等
- 児童・生徒の英語力向上のために・・・
  - ・ 英検、TOEFL Junior、Gtecなどの民間試験の全校導入
  - ・ ALTの拡充（時数増、質の向上）
  - ・ ウィロビー派遣生徒数の拡充等。
- ICT教育関連
  - ・ 児童・生徒一人1台パソコン
  - ・ 全教科デジタル教科書導入
  - ・ ICT支援員の拡充
  - ・ 3Dプリンター、ロボット、ドローン等を用いた学習の開発
- 区費教員配置による教科担任制の実施
- 区費管理職（副校長・校長）の学校配置
- 「人材バンク」の設置  
～学校運営協議会・学校支援本部などが何かしたい時に相談できるよう、こういう協力ができる、こういうことに長けている人がいるといったような情報を区が持つておく。
- 分区単位の「学校運営協議会連絡会」「学校支援本部連絡会」の設置
- 地域教育推進協議会の拡充（全区展開）  
～中学校区単位で、地域教育推進協議会を設置し、地域の教育を連続して考えられる組織体を作る（各校の学校運営協議会の集合体）
- 小学校の放課後活動、地域スポーツ、中学校の部活動を社会体育へ移行

- 部活動拠点校の推進
- 部活動支援員の拡充
- 全教室のエアコン設置
- 校庭の人口芝への変更

#### **(5) 成人期・高齢期（成人教育）**

- 地域の大人向けの「放課後教室」の設置  
～学校で親が自由に学べ、またボランティアで教えられるような放課後教室のようなもの。親も学べ、またそこで資格を得て仕事につながるような、親がワクワクし、その姿を見た子どもたちが学ぶ意欲を持てるような場所の設置。また、そこに参加した人たちがCS・PTAなどにも気楽に参加してくれるようになるのではないか。
- 「総合型地域文化・スポーツクラブ」の設置